

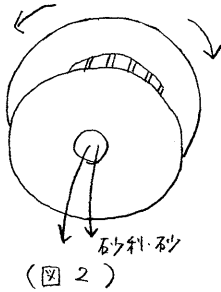
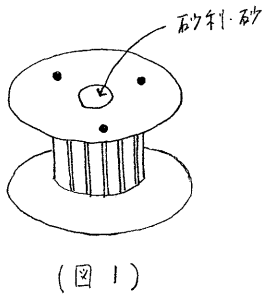
おかしな遊び場

上坂元 絵里

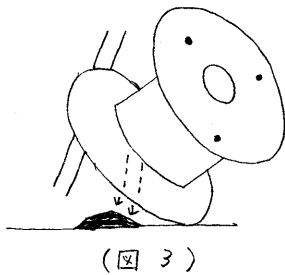
年長組の二月、卒園も近づくある日のことである。私達の園では、おかえりに各保育室を自分達で片付ける以外に、年長組は二組で分担して、園庭と遊戯室の、片付けの確認の役を担っている。年少児が片付けきれなかったところを補ったり、片付け忘れた遊具等を届けたりと、子ども達にとっては、大きい組であるという誇りをちょっぴり味わえる役割でもある。

この日は、海の組が園庭の片付けにあたっていた。この日の話題の主役は、工事用のケーブル等を巻く大型の木製糸巻（図1）だ。正式の名称はわからないが、一年程前、学内の工事の際に不要となったものを譲り受けて時期を見て園庭に遊具として置いてあった。大型は直径一メートル位のもの一個、小型は直径五〇センチメートル位のもの三個である。いつもは園庭の南西のぶどう棚の近くにおいて

あったのだが、海の組の男児四人が、大型のものを張りきって転がして山へ運ぼうとしていた。それは危ないと思い、小型の方へ変えるように伝え、その後、園庭中央のジャングルジムの近くに横にして置いてあった。いつもと違う場所にあったことも、何か子どもの心を刺激するものがあったのか、年中の子ども達が、糸巻中央の穴から砂利と砂を一生懸命入れて遊んでいた(図1)。さて、片付けの段になりT男、M子、G男が「わあ、誰だ、こんなに入れちゃったのは」とあきれたような口調で言いながら、糸巻を起こそうとするが持ち上がらない。私も



駆けより、三人に同じ側に並ぶように言い、持ち上げようとするがびくともしない。私はあきらめて、テラスの方の片付けを手伝いにいく。それでもT男は「ねえ、皆集まって」と大声で呼びかけ、少したつと「持ち上がったよ」という喚声、ふり返ってみると何人かで前後に少しずつ転がして、中央の穴から砂利を出している(図2)。S男が曲乗りのように乗っていたので「上に乗るのはやめて」と声をかける。先ほど、私には動かすのはとても無理と思えたので、子ども達が力をあわせると本当にすごいと素直に驚く。しかし、しばらく転がすともう砂は



出てこなくなる。そこへいつのまにか、R男がバットをもつてきて、片方の穴から砂利を押し出し、反対の側からもう一人が手でかき出すと少しずつ出てくる。ここでもR男の機転のきく発想に感心する。

最初は、頭から無理とみなしていた私も、この頃から子ども達の勢いに巻き込まれて、ジャングルジムの一段に、横にした糸巻の片側をのせ、斜めにしてみる(図3)。すると穴から砂利が流れ落ちてきて「わー、出てきた」と喚声があがる。しかし、今度は下にまた砂利がたまって、落ちてくる砂利をせき止めてしまう。一度糸巻をおこすと、三人位がスコップ等をもつてきて、たまった砂利をよけてくれる。私は何も言わないのに、これまた素早い確かな行動である。もう一度、ジャングルジムに立てかけるが、最初こそ勢いよく出たもののすぐに止まってしまう。私は、もう一度頭をひねり、いす三脚をM子、N子と運び、糸巻をその上にのせる(図4)。そして上の穴からバットでかきまぜて落とすように

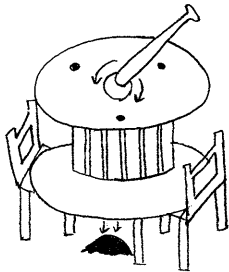
する。しかし、これでは子どもには届かない。やりたいというが、ちょっと危ない。

そんなところへ、年中組のI先生が、おかえりを終え、「ごめんなさいね、さっきはどうしても片付けられなかったから、あとで私がやるうと思っていたのよ。ありがとう」とやって来てくれる。すでに降園時刻の五分前、内心かなり焦っていた私は「じゃ、あとはI先生にお願いしましょう。時間切れ」とかなり強引に言って、引き上げさせた。

保育室へ戻り、ほぼ支度も整った頃、「今日はとても大変な片付けがあったけれど、皆で一生懸命やってくれたのよね。I先生も一人であとで片付けようと思っていたのにつとでも喜んでらしたわ」と言うなり、バタバタと数人が扉へ走りよる。片付けの続きをしていたI先生に、R男が「I先生、頑張った」と叫んだ。他の子ども次々に声をかけ、私の隣に座っていたS子は、私に「R男ちゃん、優しいね」とささやいた。

糸巻の中の砂と砂利は、ジョウロで沢山水をかけたため、重くぎっしりとつまっていた。これとはとも無理と保育者は判断していた。降園時間が気になっていたということもある。だが、皆に集まるよう声をかけたT男は、クラスの中では人間関係に苦勞している子どもであった。T男が率先して動く姿に「あれっ」と思ったり、必死で何とかしようとする子ども達の様子に、いつのまにか保育者も引き込まれている。保育者自身、本当に短い時間に必死で考え、行動していたと思う。

この降園前のひとときにも、子ども達のいろいろ



(図 4)

なやりとり、科学的に原理をとらえた工夫、機敏な行動等本当にいろいろなエッセンスが含まれていたと思う。

R男のやさしい言葉には、自分も一生懸命やったその後で、一人で奮闘するI先生の大変さもわかる気持ちがよくあらわれていた。それを受けとめる周りの子ども達の気持ちも嬉しいものだった。

いつもの私なら、焦って、「もうおかえりの時間だから、先生がやっておくからね」と言いかねなかつたと思う。保育者の中の心の動きの、紙一重の違いで、保育の中で生まれることは大きく異なる。そんな思いを改めて深く感じ、あの時、あの対応をしたおかげでいろいろな事を感じられたことに感謝するような出来事だった。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)